

## 16・17 世紀のウェールズ語聖書

山本信太郎

### はじめに

我々がイギリスと呼ぶグレート・ブリテンおよび北アイルランド連合王国は、歴史的には決してアングロ・サクソンの英語の国ではなく、ゲルマン語派の英語とは全く別言語であるケルト語派のゲール語（アイルランド語とスコットランド・ゲール語に分かれる）とウェールズ語は今なおネイティブの話者を持ち、一部日常的にも話されている。さらには、死語となったマン島語、コーンウォール語を含めれば、ブリテン諸島には5つのケルト語派の言語が存在する。現在では英語を解さない「イギリス人」は存在しないが、中世のラテン語訳聖書にかえて各地の俗語訳聖書がうみだされていった宗教改革の時代には、各ケルト語派の言語が話されている地域の住民の9割以上は、それらの言語の単一話者であったと考えられる。その中でもウェールズ語は現在最も多くの話者を持ち、ウェールズ人口約310万人のうち約20%がウェールズ語話者であるとされる。またウェールズ語聖書は、ブリテン諸島のケルト語派の言語のうちでも特異な速さで翻訳が達成された<sup>(1)</sup>。筆者は、特にモノとしての聖書のありように関心を持ち、現地イギリスでのウェールズ語聖書の閲覧・調査に注力している<sup>(2)</sup>。本稿は、17世紀末までのモノとしてのウェールズ語聖書について筆者が撮影した写真を掲げながら解説し、今後の研究の覚書とするものである<sup>(3)</sup>。なお、本稿のベースとなった調査は、ロンドンの英国図書館（British Library）とランベス宮殿図書館（Lambeth Palace Library）で行われた。

#### (1) セイルズベリ訳新約聖書（1567年）<sup>(4)</sup>

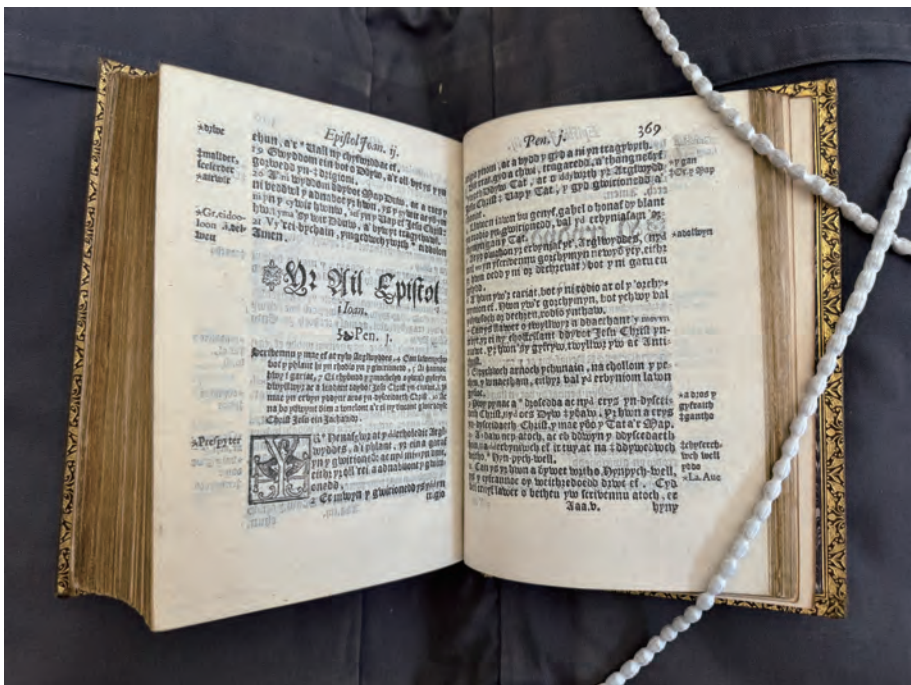
ウェールズ語聖書の翻訳は、エリザベス1世治下の議会制定法である1563年の「ウェールズ語聖書・祈禱書翻訳法」によってイングランド国家によっておし進められた。同翻訳法は、4年以内のウェールズ語聖書出版とウェールズ全教区への普及を定めたが、実際には1567年に完成したのは新約聖書のみである。そのほとんどが人文主義者ウィリアム・セイルズベリ（William Salesbury, b. before 1520, d.c. 1580）の手になる初のウェールズ語新約聖書は、一般的には極めて評判が悪く、1588年に出版され、ウェールズ史の金字塔とも評されるウィリアム・モルガン（William Morgan, 1544/5-1604）の手になる初のウェールズ語新旧両約聖書の露払いのような位置付けで説明されることが多い。

次の図①②は英国図書館で閲覧したセイルズベリ訳新約聖書で、サイズは横15cm縦20.5cm高さ4.5cmであり（本稿で示す聖書のサイズは、すべて実際に筆者が実物を測った数値である）、この後登場する1588年のモルガン訳聖書、1620年の改訂モルガン訳聖書に比べるとかなり小型である。総頁数は852頁<sup>(5)</sup>。

先述の通り、このセイルズベリ訳聖書は同時代人からも、現代の研究者からも悪文であるとの酷評が多く、例えばウェールズ出身の最初期の分離派ピューリタンとして、また、マーブレリト文書<sup>(6)</sup>の作成



図① セイルズベリ訳新約聖書・中表紙（英国図書館）



図② セイルズベリ訳新約聖書・本文「ヨハネの手紙一」（英国図書館）

者とされて処刑されたことで有名なジョン・ペンリ (John Penry, 1562/-1593) がこの聖書について「読む人にとっては最も哀れなほど読みづらく、聞く人にとっては 10 人に 1 人も理解出来ない」と記していることは、多くの文献で言及されている<sup>(7)</sup>。しかし、実際のセイルズベリ訳聖書のウェールズ語の文章を詳細に検討した研究はほとんどなく、当時のウェールズ人にとって本当に読みにくかったのかどうかということを含めて、読書の対象としてのセイルズベリ訳聖書のウェールズ語については、再検討が要請されていると言える<sup>(8)</sup>。

なお、セイルズベリ訳聖書に付されたページ数は見開きの右肩にのみ記されており、2 頁につき 1 つの頁数で進む形式である。また、途中頁数が乱れているところもあり、例えば上記図②の「ヨハネの手紙一」は次の見開きの 270 頁に進むが、「ヨハネの手紙二」が始まるその次の見開きは再び 269 頁となっている。

## (2) ウィリアム・モルガン訳聖書 (1588 年)<sup>(9)</sup>

1563 年の「ウェールズ語聖書・祈禱書翻訳法」が 4 年以内の出版を命じたのは新旧両約聖書の全体であったが、先に述べた通り 1567 年に完成したのは新約聖書のみであり、また、セイルズベリの訳業は、さまざまな事情が推測されているものの、いずれにせよストップしてしまった。初のウェールズ語新旧両約聖書の完成は 1588 年出版のウィリアム・モルガンの手になる聖書を待たねばならない。モルガン訳聖書は、読みやすさの面からも文学的な面からも高く評価され、ルタードイツ語訳聖書がそうだったように、その後、書き言葉としてのウェールズ語が整えられていく上で大きな役割を果たしたとされる。

モノとしてのモルガン訳聖書は、先のセイルズベリ訳新約聖書に比べるとかなり大型で、サイズは横 20 cm 縦 29 cm 高さ 7.5 cm、総頁数は 1122 頁である。基本的には教会堂の講壇に置かれて礼拝の際に



図③ モルガン訳聖書・中表紙 (英国図書館)





図④ モルガン訳聖書・新約聖書中表紙（ランベス宮殿図書館）



図⑤ モルガン訳聖書・表紙（英国図書館）



図⑥ モルガン訳聖書・表紙（ランベス宮殿図書館）

読まれるための聖書であると考えられる。中表紙は赤と黒の2色刷りで装飾も凝っており（図③）、本文内の飾り絵も多い（図④）。

なお表紙についても述べておきたい。英国図書館所蔵のモルガン訳聖書とランベス宮殿図書館所蔵のモルガン訳聖書の表紙を比較すると、色合いもデザインも異なっていることは明らかであろう。英国図書館所蔵のモルガン訳聖書の表紙に刻印された紋章は18世紀のイギリス王室のものであると同定され（図⑤）<sup>(10)</sup>、したがって、少なくともこのモルガン訳聖書の表紙は1588年のオリジナルのものではあり得ず、おそらく英国図書館が収蔵した後に新たに製本し直した表紙であると考えられる。

他方、ランベス宮殿図書館所蔵のものにはカンタベリー大主教の紋章が刻印されている（図⑥）。カンタベリー大主教の紋章は左右の紋章の組み合わせから成っており、左側の紋章がカンタベリー大主教固有のもので、右側の紋章が大主教個人のものとなっていて、この右側部分によってカンタベリー大主教個人が特定出来る。モルガン訳聖書の表紙に刻印されているのは、カンタベリー大主教ジョン・ホイットギフト（John Whitgift, 1530/31?-1604, 任 1583-1604）の紋章であり、モルガン訳聖書が出版された1588年当時のカンタベリー大主教であるとともに、モルガンが聖書前文の献辞においても言及している大主教である<sup>(11)</sup>。それゆえ、この表紙がオリジナルのものである可能性はあるが、聖書の表紙にカンタベリー大主教個人の紋章が刻印されていることへの違和感は拭えず、やはりカンタベリー大主教のロンドン公邸であるランベス宮殿に収蔵された後に製本し直された表紙である可能性も高い。このあと取り上げる改訂モルガン訳聖書も、ランベス宮殿所蔵のものの表紙には出版年である1620年当時のカンタベリー大主教ジョージ・アボット（George Abbott, 1562-1633, 任 1611-1633）の紋章が刻印されている。また、ランベス宮殿図書館のオンラインカタログには「来歴（Provenance）」の項目があるが、装丁にホイットギフト大主教の紋章がある、としか記載されておらず、表紙がオリジナルかどうか、またオリジナルでないなら製本時期はいつなのかといった情報は含まれない。実際に宗教改革期の人々が手に取ったモノとし

でのモルガン訳聖書の姿を知りたいと考える筆者の関心からすると、オリジナルの装丁のモルガン訳聖書に辿り着く手がかりはないことになる。そのような情報は一般的に図書館のカタログには含まれていないことが通常であり、この点は、書物の内容（テキスト）にのみ関心を寄せ、表紙や装丁を含むモノとしての書物全体のありように関心を向けてこなかったとも言える図書館という施設の収蔵方針の、ある意味弱点でもあると言えるかもしれない。モルガン訳聖書以降のこのあと取り上げるウェールズ語聖書のモノとしてのありようにおいても、表紙の問題は今後の課題となることを確認しておきたい。

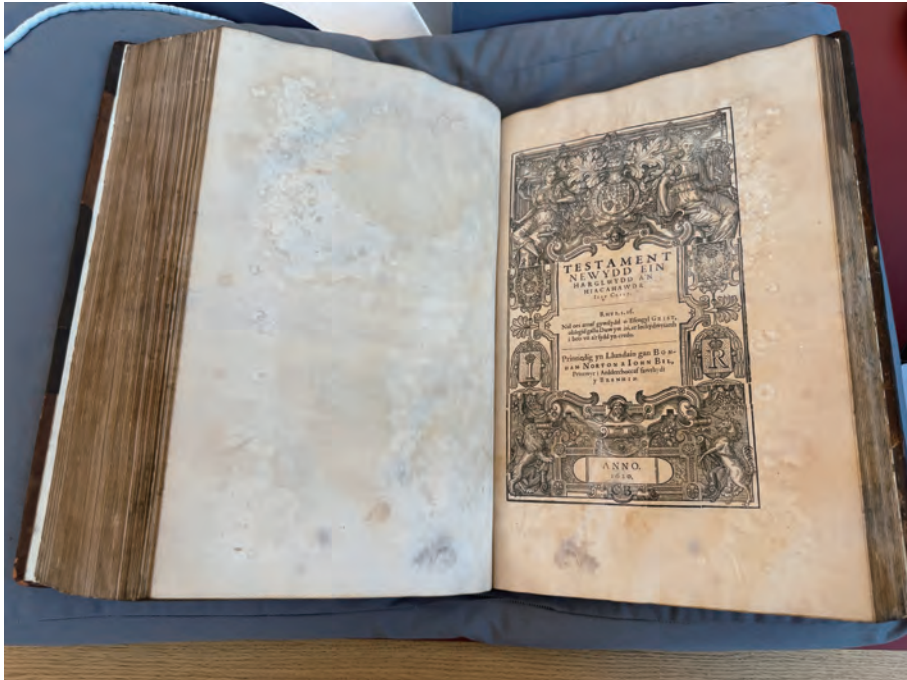
### (3) 改訂モルガン訳（パリー・デイヴィス訳）聖書（1620年）<sup>(12)</sup>

モルガンの死後、1611年に有名な欽定英訳聖書が出版されると、それに対応してモルガン訳聖書も改訂された。改訂者はモルガンの後任のセント・アサフ主教リチャード・パリー（Richard Parry, 1560-1623）とモルガンの聖書翻訳の助手をつとめ、ウェールズ・メリオネスシャのマスルウィド教区司祭となっており、パリーの義兄弟でもあったジョン・デイヴィス（John Davies of Mallwyd, c. 1570-1644）であり、彼らによる改訂モルガン訳聖書は1620年に出版された。なお、訳業については、ほとんどデイヴィスの手になると考えられている。また、テキストとしてはこの1620年版のウェールズ語聖書がその後現代まで用いられることになり、モルガン訳聖書400周年を記念して1988年に出版された『新ウェールズ語聖書（*Y Beibl Cymraeg Newydd*）』まで読み継がれることになった。それゆえ、近世・近代を通じて読書の対象となったウェールズ語聖書は、モルガンが直接訳した1588年版聖書ではなく、このパリー・デイヴィス訳聖書ということになるが、この1620年の改訂は大きなものではなく、モルガンの翻訳方針をよりおし進めたものであったともされ<sup>(13)</sup>、モルガンの訳業の歴史的意義は今なお高く評価されている。しかし、実際にこの改訂モルガン訳聖書がどの程度モルガン訳の文章を継承し、どの程度改訂されているかについては、1567年のセイルズベリ訳新約聖書本文の内容と同じ

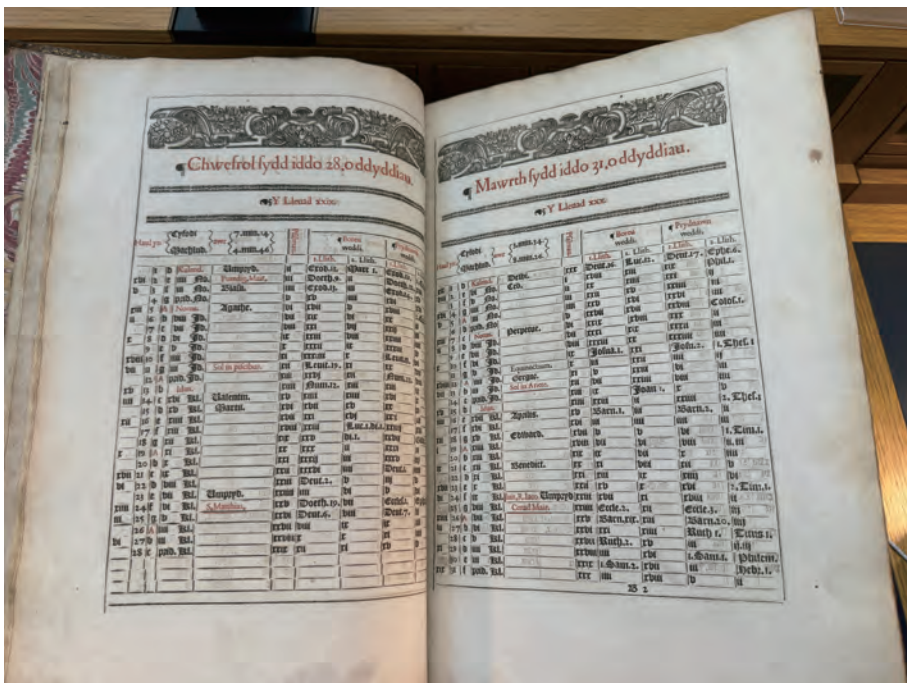


図⑦ 改訂モルガン訳聖書・中表紙（英国図書館）





図⑧ 改訂モルガン訳聖書・新約聖書中表紙（ランベス宮殿図書館）



図⑨ 改訂モルガン訳聖書・黒赤印刷頁（英国図書館）



図⑩ 改訂モルガン訳聖書の末尾の正誤表（英国図書館）

く、今後より詳細に明らかにされる必要があるだろう<sup>(14)</sup>。

モノとしての改訂モルガン訳聖書は、モルガン訳聖書よりもさらに大型で、これも講壇で読まれることを目的にしたものであると考えられる。サイズは横 28 cm 縦 43 cm 高さ 10 cm であり、写真のサイズ感から判断すると、モルガン訳よりもさらに講壇用という用途を明確に意図していたと言えるかもしれない。中表紙（図⑦）や新約聖書中表紙（図⑧）はモノクロであるが、一部黒と赤の二色刷りの部分もある（図⑨）。また、英国図書館所蔵の改訂モルガン訳聖書の後ろには 1670 年代に個人的に印刷されたと考えられる正誤表と一緒に製本されており（図⑩）<sup>(15)</sup>、おそらくは英国図書館に収蔵された際に同聖書に挟み込まれていたと考えられる。したがって、この英国図書館所蔵の改訂モルガン訳聖書は 17 世紀後半にも実際に礼拝などで用いられていたことが推定される。

#### （4） 小型聖書（1630 年）<sup>(16)</sup>

一般に小型聖書（Beibl Bach）として知られる聖書で、その名の通り初の「ハンディ」なウェールズ語新旧両約聖書であり（新約聖書のみである 1567 年のセイルズベリ訳書も「ハンディ」と言えるかもしれない）、片手で持つことが出来る（図⑪⑫）。この聖書の出版をめぐるのは、ウェールズ出身の富裕な 2 人のロンドン商人、トマス・ミドルトン（Sir Thomas Myddelton, 1549×56-1631）とロウランド・ヘイリン（Rowland Heylyn, 1562-1632）が莫大な出資を行なったとされ、「ミドルトン聖書（Beibl Midlwn）」とも呼ばれる<sup>(17)</sup>。この小型聖書は価格も 5 シリングと比較的安価で、概説的には家庭向けであったとされるが、出版部数は 1500 部と決して多くはなく、その普及についてはより詳細な検討が求められる<sup>(18)</sup>。他方、小型の聖書については、初のウェールズ語新旧両約聖書を完成させたウィリアム・モルガン自身が計画していたとも言われており<sup>(19)</sup>、出資した 2 人のロンドン商人の意図も含めて、この小型聖書出版の背景も今後の検討課題となるであろう。また、その点の解明が初のウェールズ語聖書





図⑪ 小型聖書（英国図書館）



図⑫ 小型聖書・中表紙（英国図書館）



図⑬ 小型聖書・共通祈禱書冒頭頁（英国図書館）



図⑭ 小型聖書・詩編歌集中表紙（英国図書館）



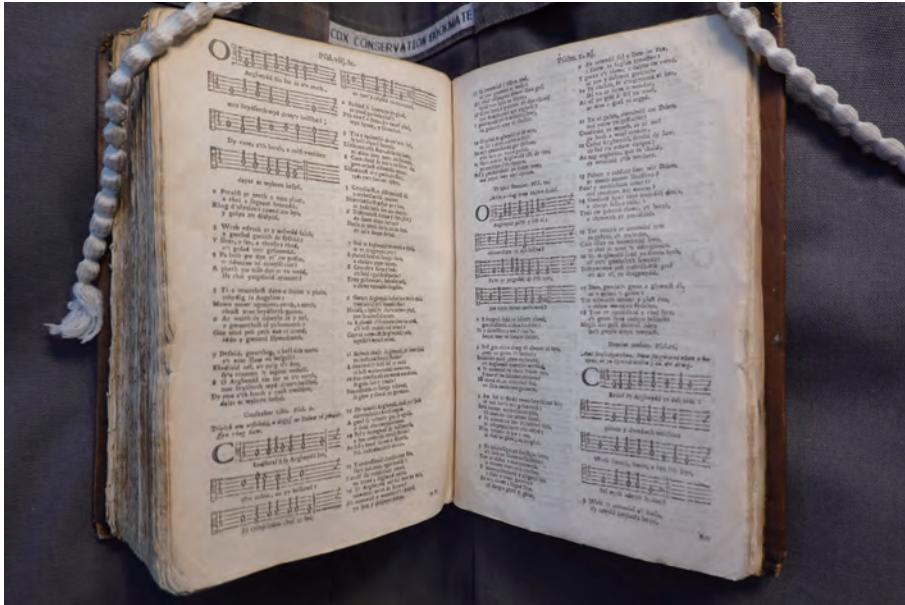


図15 小型聖書に合冊された詩編歌集の楽譜が掲載された頁（英国図書館）

出版からおよそ半世紀を経たこの時期の、ウェールズ語聖書に対する人々の眼差しや期待、ひいては実際の向き合い方や読書のありようを解明する手がかりになると考えられる。さらには、そのようなウェールズ語聖書へのウェールズ人の取り組みが、その他のケルト語派の言語圏における宗教改革にいかなる影響を及ぼしたかも今後考えてみたい。

モノとしての小型聖書は、サイズは横 11.5 cm 縦 17 cm 高さ 5 cm で、総ページ数は 1118 頁である。この小型聖書は、単に小型であるだけではなく、それまでの聖書とは大きく異なっている点があり、聖書本体の前にウェールズ語の共通祈禱書（図13）が、聖書本体の後にはウェールズ語の詩編歌集（図14）が合冊されている。そのような事実からは、この小型聖書が実際に礼拝の場で個人によって用いられることを前提としている点が強く推測される。また、この小型聖書に合冊された詩編歌集は楽譜が挿入されたものであり、礼拝の場での使用を前提としているという推測は、この事実によってもさらに補強されるであろう（図15）。ただし、実際にはこの「合冊」がもともと出版時点で行われていたのか、その後個人などでなされたものなのかは判然としない、という点には注意が必要である。というのも、筆者が実際に閲覧した英国図書館所蔵の小型聖書とランベス宮殿図書館所蔵の小型聖書は、ともに共通祈禱書・詩編歌集が合冊されているが、オンラインデータベースである EEBO (Early English Books Online) には 2 種類の 1630 年版小型聖書が収録されており、ケンブリッジ大学クイーンズ・カレッジ所蔵のものには合冊があるものの、オックスフォード大学ボドリアン図書館所蔵のものには、祈禱書・詩編歌集ともに合冊されていない。さらに、英国図書館のオンラインカタログでは、小型聖書に合冊された共通祈禱書と詩編歌集は別々の文献として扱われ、それぞれセルフマークが付されている<sup>(20)</sup>。この点については、後に紹介する 1677/78 年聖書の事例においても論じることしたい。

#### ノンコンフォーマーミスト (5) 非国教徒豆新約聖書 (1647 年)<sup>(21)</sup>

非国教徒によって非国教徒のために編集・出版された、最初のウェールズ語聖書と評価される<sup>(22)</sup>。また、1567 年以来初の新約聖書のための出版である。その特徴は写真で見ると一目瞭然で、手のひらに





図⑯ 非国教徒豆新約聖書（英国図書館）



図⑰ 豆聖書・本文「マタイによる福音書」1章（英国図書館）

収まる超小型の、言わば「豆聖書」である(図⑬)。サイズは横 7.5 cm 縦 13 cm 高さ 3 cm で、新約聖書のみであるにもかかわらず、1 頁の文字数が少ないため(図⑭), 総頁数は 822 頁となっている。この聖書は、1630 年の小型聖書の方向性をよりおし進めたものと考えられるかも知れないし、あるいは生活の中で肌身離さず聖書に向き合おうとしたピューリタンの信仰の姿勢を反映させたものと解釈出来るかも知れない。また、この聖書の編集・出版には、いわゆるピューリタン革命期における「ウェールズ福音宣教」に最も大きな影響力を持ったと考えられるウェールズ出身のピューリタン、ヴァヴァサ・パウエル(Vavasor Powell, 1617-1670) も関わったとされる<sup>(23)</sup>。パウエルは、17 世紀中葉においてウェールズ語聖書が「売り切れてしまった」ことに言及しており<sup>(24)</sup>、ウェールズ語聖書の慢性的な不足を嘆いていたとも考えられる。その観点からも、パウエルがこの豆聖書出版にどのように関わったのか、そしてどのような状況から出版が進められたのかも検討されるべきであろう。

#### (6) クロムウェル聖書 (1654 年)<sup>(25)</sup>

オリヴァ・クロムウェル(Oliver Cromwell, 1599-1658, 任 1653-1658) の護国卿政権期に出版されたウェールズ語聖書である。クロムウェル聖書と呼ばれることもあるが、クロムウェルが直接出版に関わったわけでも、表紙などにクロムウェルの名前が見られるわけでもなく、伝統的に出版費用の捻出に一部クロムウェルが関わったとされることによる名称である<sup>(26)</sup>。ただし、この聖書の最大の特徴は、これまでの新旧両約聖書には必ず含まれていた旧約聖書外典<sup>アポクリファ</sup>が省略されている点にあり、この点はピューリタンの傾向を反映していると言えるかも知れない。聖書本体の後の詩編歌集の合冊はあるが、共通祈禱書は合冊されていない点も非国教徒的と考えられるだろう。出版部数は 6000 部と推測されており、それまでのウェールズ語聖書に比べて格段に多い。モノとしてのクロムウェル聖書のサイズは横 14 cm 縦 17 cm 高さ 5 cm で、ほぼ 1630 年版小型聖書と同じハンディなサイズであるが、共通祈禱書と



図⑮ クロムウェル聖書・中表紙(英国図書館)



図19 クロムウェル聖書・新約聖書中表紙（英国図書館）

外典が含まれていない分、総頁数は1630年版小型聖書が1118頁であるのに対して、822頁と少ない（図18・19）。

#### (7) 詩編付き新約聖書（1672年）<sup>(27)</sup>

ここで取りあげる聖書は、註3に挙げたベイリングのウェールズ語聖書のリストや、英国図書館のカタログではウェールズ語新約聖書としてリストアップされているが、新約聖書本体の前後に散文および韻律の詩編を合冊したもので、全体の中表紙のタイトルは「新約聖書付き詩編」となっており（図20）<sup>(28)</sup>、むしろ詩編の方がメインとも考えられる。サイズは横11 cm 縦17 cm 高さ3.8 cmで、総頁数は632頁となっており、1647年の豆新約聖書よりは大きいですが、1630年版小型聖書やクロムウェル聖書よりは小振りで、新約聖書と詩編だけであるので当然それらよりも薄い（図21）。韻律の詩編はごく一部で、楽譜も付いていないため礼拝で詩編歌を歌うための仕様はあまり意識されていないように思われる。むしろ、現代でも新約聖書に詩編を合わせた「新約聖書詩編付き」が出版されているが、そのような伝統の先駆けと言えるかも知れない。現在の日本聖書協会では、その他に新約聖書に旧約聖書の「詩編」に加えて「箴言」を合わせたものも出版している。その意図は、旧約聖書の中でも最も親しまれた文学作品としての詩編や箴言を抜き出して新約聖書と一緒にして、家庭や個人の読書に供することが目的であると考えられる。この1672年の詩編付き新約聖書も、サイズの面から考えても、聖書を日常的に家庭や個人で読む習慣を尊重するプロテスタントの伝統が形成されていく中での出版であったと考えられるのではないだろうか。

#### (8) 1677/78年聖書<sup>(29)</sup>

この聖書は、サイズとしては横14 cm 縦19 cm 高さ4 cm、総頁数は1110頁となっており、これまで





の小型聖書と同系列の出版と考えられ、さしたる特徴はない。しかし、1630年版小型聖書の項目の最後で述べたように、聖書と祈禱書や詩編歌の合冊を考える上では、注目すべき版である。まず、この聖書については、英国図書館に同じ書誌情報で3冊の登録があるが、それらは全て合冊の有無（聖書本体の前の共通祈禱書、後ろの詩編歌集）、外典の有無（旧約聖書と新約聖書の間）において異なっている（図22）。3冊の情報を表にまとめると以下の通りである（なお、総頁数は全て揃った G.20050.(2.) のものである）。

さらに、この聖書はベイリングのリストでも、英国図書館のオンラインカタログでも「1677/78年」と表記されているが、実際に聖書本体の中表紙では出版年は1677年と表記されており（図23）、共通祈禱書と詩編歌集が合冊されている場合、それらの中表紙には1678年と表記されている（図24）。つまり、別々に印刷された聖書、共通祈禱書、詩編歌集が用途に合わせて合冊されたりされなかったりした可能性があるのではないだろうか。例えば、共通祈禱書と旧約聖書外典が含まれていないシェルフマーク 1411.d.8. のものは、明らかにプロテスタント非国教徒向けの仕様であったと考えられる。

なお、ベイリングのリストでは、この聖書の一定数は外典および祈禱書なしで刊行（issue）され、さらにごく少数は外典のみを除外する形で刊行された、と説明されているが<sup>(30)</sup>、この場合、刊行された時点で初めから3つのバージョンが存在していたのか、それとも別々に印刷された聖書や祈禱書、詩編歌集（外典も？）が必要に応じて合冊・製本されたのか、現在のところ不明である。いずれにせよ、このような様態の聖書の存在に鑑みると、聖書における「合冊」という営みを、近世の出版文化（習慣や技法を含む）の中に位置付けて改めて検討する必要があると考えられる。

シェルフマーク	共通祈禱書	詩編歌集	旧約聖書外典
G.20050.(2.)	○	○	○
1411.d.8.	×	○	×
1004.a.7.(2.)	○	○	×

表 英国図書館所蔵の1677/78年聖書の構成



図22 左から、G.20050.(2.)、1411.d.8.、1004.a.7.(2.)（英国図書館）

#### (9) 1689/90年聖書<sup>(31)</sup>

この聖書は、ベイリングのリストでは上記の1677/78年聖書のリプリントであるとされる<sup>(32)</sup>。ただし、同聖書には共通祈禱所と外典はなく、新旧両約聖書とそのあとに続く詩編歌集から成る。また、1677/78年聖書と同様に、この聖書はベイリングのリストでも英国図書館のカタログでも「1689/90年」と表記されているが、全体の中表紙の出版年が1689年、新約聖書と詩編歌集の中表紙が1690年となっている。サイズは本来は1677/78年聖書とほぼ全く同じであると考えられるが、英国図書館には



図23 1411.d.8. の中表紙 出版年は1677年



図24 1411.d.8. の詩編歌集中表紙 出版年は1678年





図②⑤ 1689/90 年聖書 左が<sup>s</sup> 1411.d.9., 右が<sup>s</sup> G.20049. (英国図書館)



図②⑥ 「天」から見た 1411.d.9. の 1689/90 年聖書

同じ書誌情報の同聖書が2冊所蔵されており、この2冊はかなり形状が異なる。すなわち、シェルフマーク 1411.d.9. のものは横 14.5 cm 縦 19.5 cm 高さ 7.5 cm であるのに対し、シェルフマーク G.20049. のものは、横 12.5 cm 縦 19.5 cm 高さ 4.5 cm で、ほとんど同じ書籍には見えない（図25）。前者の方がかなり大きいわけであるが、これは、前者がおそらくは製本の経年劣化などによりいったん全てばらした上で製本しなおしたからであると考えられる（図26）。なお、総頁数は 880 頁である。また、G.20049. のものは、この 1689/90 年聖書のオリジナルのサイズであったと考えられるが、表紙には 18 世紀に首相をつとめたジョージ・グレンヴィル（George Grenville, 1712-1770, 任 1763-1765）の三男で、政治家で愛書家・書籍収集家としても有名なトマス・グレンヴィル（Thomas Grenville, 1755-1846）の紋章が刻印されているので、表紙自体はオリジナルではないことが分かる。これらの点については、英国図書館のカatalogには一切言及はない。モノとしての聖書を図書館に所蔵された実際の聖書の調査から考えていこうとする場合、こういった図書館による書物の修復という営みにも留意する必要があることを考えさせられる。

#### （10） 1690 年大型聖書<sup>(33)</sup>

サイズは横 24 cm 縦 39 cm 高さ 7 cm と 1620 年の改訂モルガン訳聖書よりは若干小さいが、明らかに大型の聖書であり（図27）、共通祈禱書や詩編歌集の合冊もない（旧約聖書外典は含まれる）ことから、教会の講壇用聖書であると考えられる。1620 年の改訂モルガン訳聖書以来、実に 70 年ぶりの講壇用聖書であり、改訂モルガン訳聖書の項目で、英国図書館所蔵の同聖書に 1670 年代の正誤表が挟まれていたことから、同聖書が 17 世紀後半まで 50 年以上にわたって礼拝で用いられていたと推測されることを述べたが、講壇用大型聖書がこの間ずっと出版されなかったことを考えると、ある意味当然と言えるかもしれない。1690 年大型聖書の総頁数は 1058 頁で、本文には挿絵などはないが、中表紙にはか



図27 1690 年大型聖書（英国図書館）





图28 1690 年大型聖書・中表紙（英国図書館）



图29 1690 年大型聖書・新約聖書中表紙（英国図書館）



なり凝った飾り絵があしらわれている(図⑳㉑)。また、同聖書はウェールズ語聖書としては初めてロンドン以外、すなわち、オックスフォード(Rhydychain)を出版地とする聖書である。

ペイリングのリストによれば、この聖書は一般的には「ロイド主教聖書 (beibl yr Esgob Llwyd)」として知られており、ウェールズの家系でセント・アサフ主教であったウィリアム・ロイド(William Lloyd, 1627-1717, 任 1680-1692)が出版の主たる推進者であった<sup>(34)</sup>。ロイドは、名誉革命にもつながった1688年の七主教裁判事件、すなわち、国王ジェイムズ2世の信仰自由宣言を拒否して投獄された7人の主教のうちの1人でもある。彼はまた、名誉革命後も新国王ウィリアム3世に重用され、コヴェントリー・アンド・リッチフィールド主教、さらにはウスタ主教をつとめた。17世紀中葉以降、ウェールズ語聖書には非国教徒の影響力が大きかった印象が強いが、イングランド国教会で重きをなしたロイドのような人物もウェールズ語聖書の出版をおし進めた事実は、当該期のウェールズにおけるウェールズ語聖書へのまなざしを考える上で重要な論点になるであろう。

## おわりに

本稿は、17世紀末までに出版されたウェールズ語聖書について、主としてモノとしてのありようの観点から、筆者が図書館で調査した結果を中心に、そのような調査に伴う問題点・疑問点を含めて紹介した。なお、時期を17世紀末までに区切った点にさしたる理由はない。筆者が今後論じることの出来る射程が最大でも17世紀末くらいまでであると思われることに鑑みて、とりあえず17世紀末までに出版された全てのウェールズ語聖書について検討を試みてきた。もちろん、18世紀に入ってもウェールズ語聖書の出版は続けられており、例えば18世紀のウェールズ語聖書については、巻末の聖書世界の地図が重要なコンテンツとなってくることなど、その特徴を挙げる事が出来る(図㉒)。巻末の聖書



図㉒ 1718年版聖書巻末に折り込まれた「使徒たちの旅」と題された地図(英国図書館)

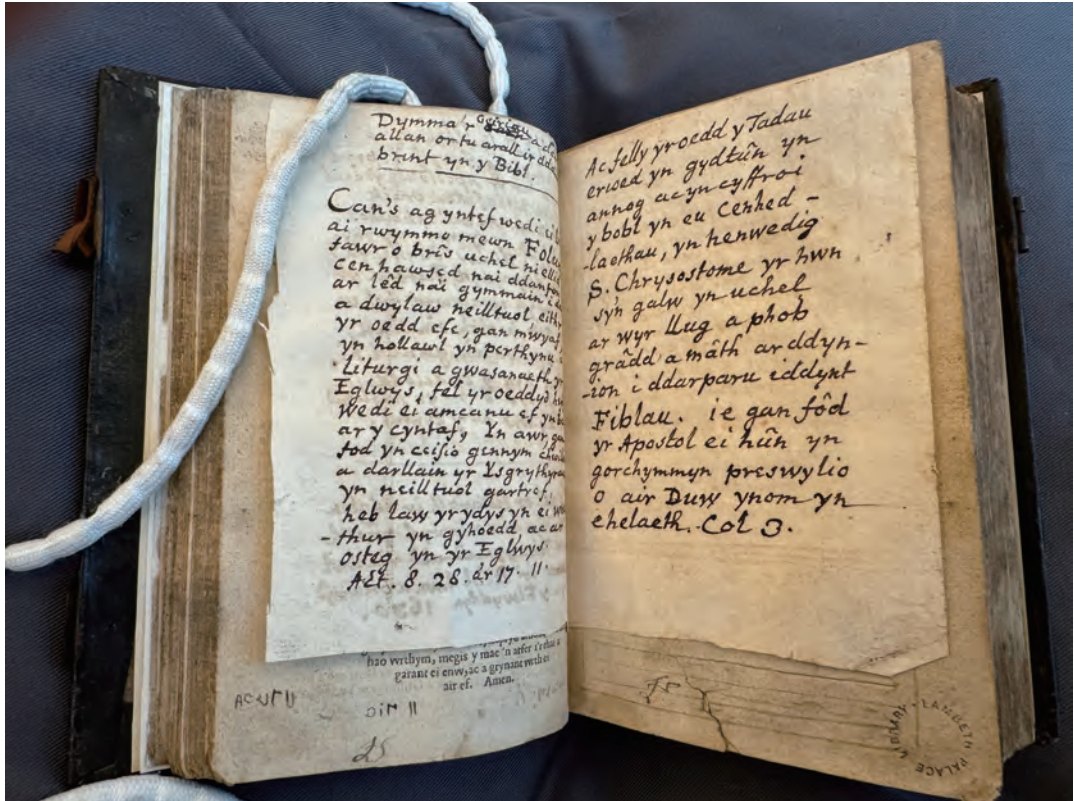


図③ 1630年版小型聖書・新約聖書中表紙の隣のページにアルファベットの羅列の書き込みがある（ランベス宮殿図書館）

地図は現代の聖書にも見られるものであり、このように徐々に現在の聖書のコンテンツが出揃っていく過程を見られること自体が、モノとしての聖書の調査を興味深いものになっている。また、18世紀はウェールズにおいて非国教徒が爆発的に勢力を伸ばす時期であり、そのような歴史的背景とモノとしてのウェールズ語聖書のありようがどのように変化してくるのかについては、もはや筆者の能力を超える問題となるが、重要な課題となるであろうことを付言しておくたい。

本稿の検討からは、17世紀末までのウェールズ語聖書のモノとしてのありようを網羅的に検討した結果、当然ではあるが、取り上げた全ての聖書には大きな差異があることが明らかとなった。テキストとしてのウェールズ語聖書は、1620年以来近世・近代を通じて変化していない。しかし、17世紀末までに出版されたウェールズ語聖書をモノとして見た場合、サイズや装飾などを含めた形状は大きく異なっていた。さらに、図書館でのウェールズ語聖書の実物を調査してきた結果、モノとしての聖書には表紙を含む製本の時期と方法、合冊の有無、図書館による修復の有無といったことがらを注意深く検討しなければ、データ上は同じ書誌情報の聖書でも、モノとしての姿は相当異なっていた可能性があるという点も明らかとなった。それぞれのウェールズ語聖書のモノとしてのありようは、それらをいかに用いるか、そのような聖書を何故普及させようとしたのか、といった出版の意図が反映されていたはずであり、また、そのような出版意図は当該時期の宗教的な状況や需要と密接に結びついていたと考えられる。また、当該聖書を出版することを推進したのがどのような人々であったのかも重要な要素であろう。そのようにして考えると、出版されたウェールズ語聖書のありようの変遷を軸にして、近世ウェー





図③ 小型聖書に挟み込まれたウェールズ語メモ（ランベス宮殿図書館）

ルズの宗教史を描くことも可能であると考えられ、本稿はそのような試みの準備作業としても位置付けることが出来よう。

筆者が、モノとしての聖書を検討する際にもう一つ注目するべきであると考えていることは、聖書の欄外への手書きの書き込みである。筆者は、これまで2023年3月と2024年3月の渡英の際に、英国図書館とランベス宮殿図書館でウェールズ語聖書の実物の閲覧・調査を進めてきたが、量の多寡はあるものの、かなりの数の聖書に書き込みが見つかった。当然、同じ版の聖書でもモノとして違えば（つまり所蔵図書館が異なれば）異なった書き込みが見出される。筆者が最初にウェールズ語聖書への書き込みに注目したのは英国図書館で閲覧した1630年版小型聖書の聖書本文と詩編歌集の間で見つかったもので、それについては別稿で論じた<sup>(35)</sup>。同じ1630年版小型聖書でも、ランベス宮殿図書館所蔵のものには、随所に大量の書き込みがあり、意味があるとは思えないようなアルファベットの羅列の書き込み（文字の練習か？）や（図③）、さらにはウェールズ語のメモ書きが挟み込まれているのも見出すことが出来た（図④）。一番良く見られる書き込みは、その聖書が贈り物である場合、献呈者と献呈先を記したもので、例えば、1677/78年聖書のうち、共通祈禱書と旧約聖書の合冊がない英国図書館所蔵の聖書（シェルフマーク：1411.d.8.）の冒頭の見返しの遊び頁部分には、1826年4月14日付で、ジョーンズ師（Rev. D. Jones）なる人物から国王ジョージ3世の六男であるサセックス公爵（Augustus Frederick, Prince, duke of Sussex, 1773-1843）への贈り物であるとの書き込みが見出された（図⑤）。なお、同聖書は合冊の様態から非国教徒向けであると考えられるが、現在のところ贈り主であるジョーンズ師が何者であるかは不明であるし、サセックス公にも特に非国教徒と近いとの情報も見出せなかった。ま



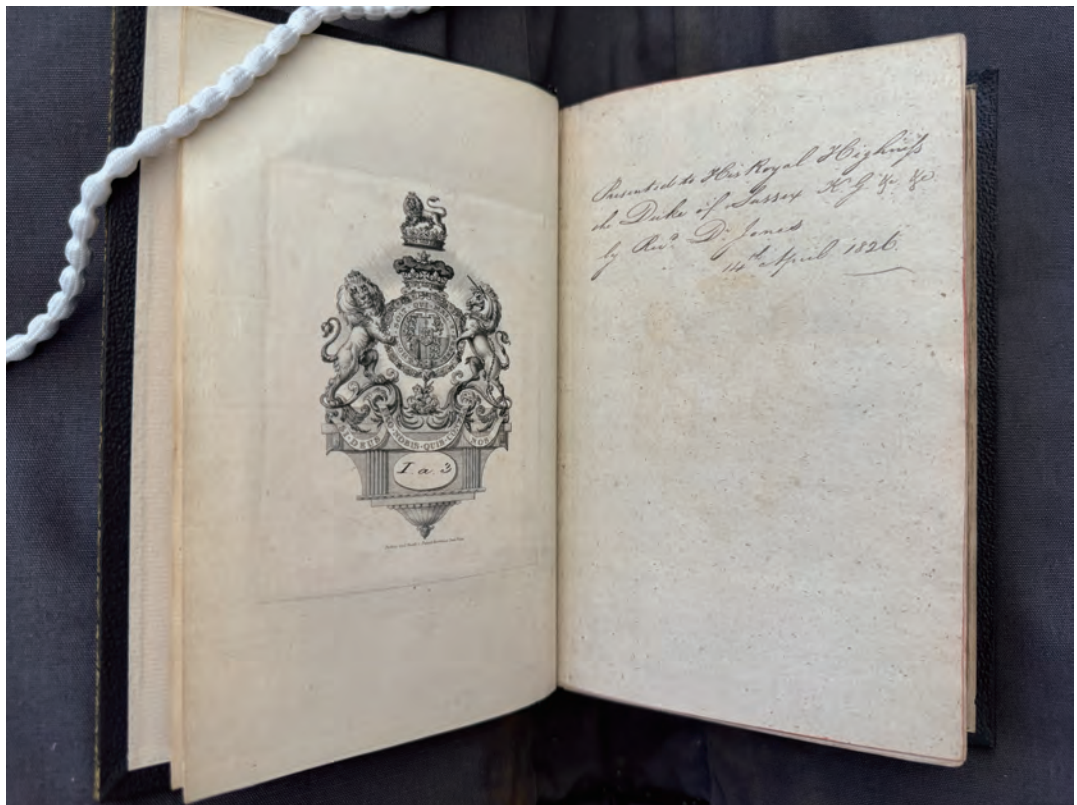


図33 1677/78年聖書の見返し遊び頁の書き込み（英国図書館）

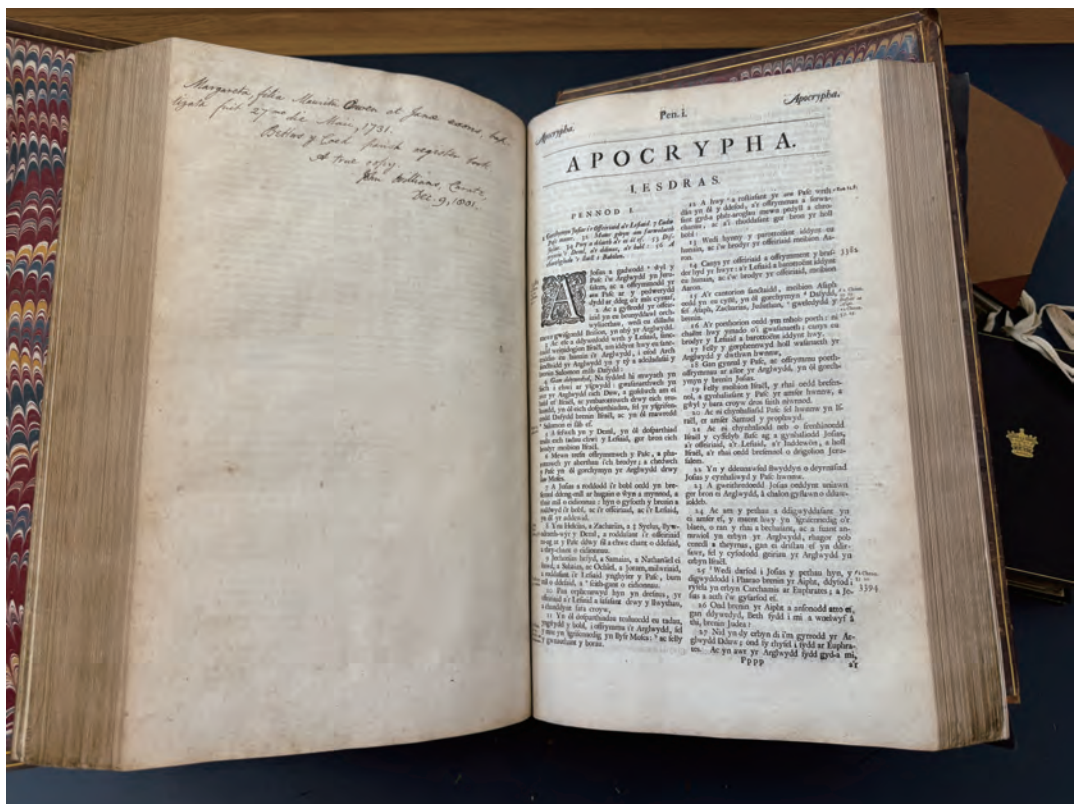


図34 1690年大型聖書の旧約聖書外典開始頁の隣頁の書き込み（英国図書館）

た、以上のようないわゆる家庭・個人向けと考えられる聖書以外でも、例えば、1690 年大型聖書の旧約聖書が終わって、旧約聖書外典が始まる頁の左側頁にも書き込みが見られた (図34)。このようなウェールズ語聖書への書き込みをさらに収集し、それらを解説することによって、モノとしての聖書の所有者や、それらの聖書が出版後どの時期までにどのように用いられていたのかをある程度明らかにすることが出来ると考えられる。そのような検討の集積の上に、ウェールズ語聖書を軸にした近世ウェールズのプロテスタント化の文化的諸相を描くことが期待されるであろう。以上述べてきたことを今後の課題として、本稿を閉じることにしたい。

## 注

- (1) 初のウェールズ語聖書出版の経緯については、以下の拙稿を参照。山本信太郎「ウェールズと宗教改革——ウェールズ語聖書の誕生」岩井淳・道重一郎編『複合国家イギリスの地域と紐帯』刀水書房、2022 年。
- (2) その成果の一部は、以下の拙稿にも示されている。山本信太郎「近世ウェールズにおけるウェールズ語聖書普及の社会史的考察に向けて」『ケルティック・フォーラム』第 27 号、2024 年、21-31 頁。
- (3) 1900 年までのウェールズ語の聖書、礼拝書の極めて詳細な書誌情報は、以下の巻末のビブリオグラフィで確認することが出来、本稿も基本的にその情報に沿っている。John Ballinger, *The Bible in Wales, A study in the history of the Welsh people, with an introductory address and a bibliography*, London, 1906.
- (4) *Testament Newydd ein Arglwydd Jesu Christ.*, London: Henry Denham, 1567. なお、近世の書物のフルタイトルは極めて長い場合が多く、例えば同書のフルタイトルも以下の通りであるが、それぞれの聖書の書誌情報を示す場合はメインタイトル (と判断出来る部分) のみを示す。*Testament Newydd ein Arglwydd Jesu Christ. Gwedy ei dynnu, yd y gadei yr ancyfaith, 'air yn ei gyllydd or Groec a'r Latin, gan newidid ffurf llythyreu y gairiaeddi. Eb law hyny y mae pob gair a dybiwyt y vot yn andeallus, ai o ran llediaith y 'wlat, ai o ancynefinder y devnydd, wedy ei noti ai eglurhau ar 'ledemyl y tu dalen gydruchiol.*
- (5) 各聖書の頁数の情報は註 3 に挙げたベイリンガの文献に拠る。
- (6) マープレリト文書については、さしあたって以下を参照。山根明大「「マープレリト書簡」と 16 世紀末イングランドの主教制度を巡る論争」『史苑』84 巻 1 号、2024 年、47-68 頁。
- (7) Gruffydd Aled Williams, 'Bibles and Bards in Tudor and Early Stuart Wales', in G. Evans & H. Fulton, eds., *The Cambridge History of Welsh Literature*, Cambridge, 2019, p. 236.
- (8) 小池剛史氏がこの問題に取り組んでおり、第 44 回日本ケルト学会大会 (2024 年 10 月 19 日・20 日) において「モルガン／デイヴィス訳聖書 (1588 年／1620 年) の言葉遣いの記述：モルガン訳聖書のウェールズ語とセイルズベリ訳聖書 (1567 年) との比較を通して」との口頭報告が行われた。
- (9) *Y Beibl Cyssegr-Lan. Sef yr Hen Destament, a'r Newydd.*, London: Christopher Barker, 1988.
- (10) 英国図書館所蔵のモルガン訳聖書に刻印されたイギリス王室の紋章は、1714 年にハノーヴァー朝が成立してから、グレート・ブリテン王国がアイルランド王国と合同する直前の 1800 年まで用いられていたものであると考えられる。
- (11) モルガン訳聖書の献辞については、註 1 に挙げた拙稿を参照。山本「ウェールズと宗教改革」72-78 頁。
- (12) *Y Bibl Cyssegr-lan, sef yr Hen Destament a'r Newydd.*, London: Bonham Norton, John Bill, 1620. なお、この改訂モルガン訳聖書では、出版地はウェールズ語で Llundain と表記されているが、聖書の書誌情報を示す場合は London で統一する。以下同じ。
- (13) Ceri Davies, 'The Welsh Bible and Renaissance Learning', in Richard Griffiths, ed., *The Bible in the Renaissance: Essays on Biblical commentary and translation in the fifteenth and sixteenth centuries*, London and New York, 2001, p. 194.
- (14) デイヴィスについては、以下の論集がある。Ceri Davies, ed., *Dr. John Davies of Mallwyd, Welsh Renaissance Scholar*, Cardiff, 2004.
- (15) 正誤表と考えられる印刷物の書誌情報は、英国図書館のカタログによれば以下の通り。Charles Edwards, *Some Omissions and Mistakes in the British Translation and Edition of the Bible, appointed to be had and read in the Churches in Wales, to be supplied and rectified.*, 1672?.
- (16) *Y Bibl Cyssegr-lan*, London: Robert Barker, 1630.

- (17) Ballinger, *op.cit.*, bibliography, p. 9.
- (18) そのような検討の一端は、註2に挙げた拙稿にも一部含まれている。山本「近世ウェールズにおけるウェールズ語聖書普及の社会史的考察に向けて」25-28頁。
- (19) Eryn M. White, *The Welsh Bible*, Stroud, 2007, pp. 39-40.
- (20) 共通祈禱書: *Llyfr Gweddi Gyffredin*, London: Robert Barker, 1630? (シェルフマーク: C.36.d.2.(1.)). 詩編歌集: *Llyfr y Psalmau vvedi ev cyfieithu, a'i cyfansoddi ar fesur cerdd, yn Gymraeg*, London: Robert Barker, 1630 (シェルフマーク: C.36.d.2.(3.)).
- (21) *Testament Newydd ein Harglwydd a'n Hiachawdr Jesu Grist*, London: Matthew Symmons, 1647. なお、「非国教徒豆新約聖書」という呼称は筆者によるものである。
- (22) Ballinger, *op.cit.*, bibliography, p. 10.
- (23) ヴァヴァサ・パウエルと革命期のウェールズ福音宣教については、以下を参照。岩井淳「国際関係のなかのウェールズ」岩井淳編『複合国家イギリスの宗教と社会 ブリテン国家の創出』ミネルヴァ書房, 2012年, 特に第4節「ウェールズ福音宣教とヴァヴァサ・パウエル」。
- (24) Geraint H. Jenkins, *Literature, Religion and Society in Wales, 1660-1730*, Cardiff, 1978, p. 55.
- (25) *Y Bibl Cyssegr-lan, Sef yr Hen Destament A'r Newydd*, Lodon: James Flesher & Thomas Brewster, 1654.
- (26) Ballinger, *op.cit.*, bibliography, pp. 10-11.
- (27) *Testament Newydd ein Harglwydd a'n Hiachawdr Jesu Grist*, London: Matthew Symmons, 1647.
- (28) 全体の中表紙のタイトルは以下。 *Llyfre y Psalmau, ynghyd Thestament Newydd ein Hrglwydd a'n Hiachawdr Iesu Grist*. 副題の形で以下の英文タイトルが続く。 *The Book of Psalmes in Prose and Meeter; Together with the New Testament of our Lord the Saviour Jesus Christ*. したがって、ウェールズ語でも英語でも、あくまでも本来のタイトルのニュアンスは「新約聖書付き詩編」である。
- (29) *Y Bibl Cyssegr-lan, Sef yr Hen Destament A'r Newydd*, London: John Bill, Christopher Barker, 1677/78.
- (30) Ballinger, *op.cit.*, bibliography, p. 12.
- (31) *Y Bibl Cyssegr-lan, Sef yr Hen Destament A'r Newydd*, London: Charles Bill, Thomas Newcomb, 1689/90.
- (32) Ballinger, *op.cit.*, bibliography, p. 12.
- (33) *Y Bibl Cyssegr-lan, sef, Yr Hen Destament a'r Newydd*, Theatr: Rhydychain, 1690.
- (34) Ballinger, *op.cit.*, bibliography, p. 12.
- (35) 山本「近世ウェールズにおけるウェールズ語聖書普及の社会史的考察に向けて」26-27頁。



## On the Welsh Bible in the 16th and 17th century

YAMAMOTO Shintaro

### Abstract

The United Kingdom was never an Anglo-Saxon English country, and the Celtic languages of Gaelic (divided into Irish and Scottish Gaelic) and Welsh, which are completely different from the Germanic language of English, still have native speakers and are spoken in some parts of the country on a daily basis. If we include the obsolete language of Manx and Cornish, there are five Celtic languages in the British Isles. Although there is no British who does not understand English today, it is thought that at the time of the Reformation, when the medieval Latin Bible was translated into various vernacular languages, more than 90% of the inhabitants of the areas where each Celtic language was spoken were monolingual speakers of that language.

Of these, Welsh is now the most widely spoken, with approximately 20% of 3.1 million people in Wales being Welsh speakers. The translation of the Bible into Welsh was achieved at a astonishing rate compared to other Celtic languages of the British Isles, namely in the 16th century. The author is particularly interested in the history of the Welsh Bible as a material object, and has focused on researching the Welsh Bible in the historical context. This paper is a note of future research on the Welsh Bible as a material object up to the end of the 17th century, with a description and photographs taken by the author. The research on which this paper is based was conducted at the British Library and Lambeth Palace Library in London.